ISSN 1883-3748

環境教育研究マネジメントセンター

News Letter

第12号 2011.9.25

長崎大学環境科学部
URL: http://www.env.nagasaki-u.ac.jp/
Tel&Fax:095-819-2720

■第5回雲仙Eキャンレッジ推進協議会開催

2011年7月26日、環境科学部大会議室を会場として本協議会が開催されました。環境科学部は、2007年に雲仙市・長崎県環境部と三者連携の「Eキャンレッジ協定」を締結し、学生参加の体験型学習プログラムの実施や、中山間集落や温泉地域、島原半島ジオパークなどをテーマとした学生の卒業研究や教員の学術研究、市民向け公開講座の開催などを重ねてきました。

今年で節目の5年度目に入ることから、さらに活動の発展を図ろうと、地元からの要望として、公開講座のさらなる充実や、長崎県庁に環境科学部卒業生が徐々に増えてきたので、現役学生との交流の機会を設けるといったことについて、今後具体化に向けた検討をおこなう予定です。

また、雲仙市からは、2012年5月に開催される第5回ジオパーク国際ユネスコ会議に対して、研究発表やエクスカーションといったイベントに対する協力要請がなされました。センターとしては、すでに深見准教授(副センター長)が会議の実行委員会として参画したり、馬越准教授(センター運営委員)の研究室が長崎県地学会事務局として支援に取り組んだりしており、Eキャンレッジ協定にもとづく地域連携事業を積極的に推進していきたいと考えています。

■中山間地自然農業体験プログラム開講中

第1回目は6月4～5日に実施。木指小学校小田山分校跡(小田山公民館)での開講式ののち、棚田をつかった田植えと農家での民泊宿泊体験をおこないました。

第2回目は7月9日に実施。金浜川や田んぼに生息する生物の調査と地元農家との意見交換をおこないました。参加者の多くは、農家の抱える後継者問題など現実に直面している課題に初めてリアルに接する機会となったようです。

金浜川での生き物調査．右上の白い建物が小田山分校

第3回目は、10月16日に稲刈り体験と金浜川の上流観察(首頭工と水利)をとおして、中山間地域の現状にせまります。

毎回、私たちを快く受け入れてくださる、雲仙市小浜町小田山地区のみなさんに、この場を借りてお礼申し上げます。次回も、多くの学生の参加を引き続きお待ちしています。

■第5回雲仙Eキャンレッジ推進協議会開催 …… 1
■中山間地自然農業体験プログラム開講中 …… 1
■随想 ―世界遺産の島・屋久島のいま― …… 2
■書架 『東日本大震災の教訓』 …… 3
『持続可能な社会と地理教育実践』 …… 4
■連載 長崎まちエコ探検⑨ 軍艦島 …… 4

■随想 ―世界遺産の島・屋久島のいま―

センター業務専任教員　深見　聡　（環境科学部准教授・観光地理学）

2011 年 9 月 8 日～11 日、エコツーリズムに関する調査のために鹿児島県屋久島に滞在した。本稿は、そのときに感じた諸々の思いを連ねたものである。

■世界遺産は保護が目的

みなさんは、今年の小笠原と平泉の世界遺産登録のニュースをみてどのような感想を持たれたであろうか。「観光客の増加につながる」「地域活性化の起爆剤になる」といったものが大多数だったのではないかと思う。もちろん、そういう側面もあるが、世界遺産条約の目的をみると、人類の共通財産としての「顕著な普遍的価値」をもつ遺産を登録し保護していくことしか掲げられていない。つまり観光による地域振興は、あくまで知名度の向上した結果として大なり小なり起こる副次的な現象という位置づけにすぎないのである。

屋久島では、世界遺産登録の前後から観光客数が急増し、今では年間約 30 万人に達している。縄文杉への入山者は、ピーク時には 1 日で 1 千人を超えることもあり、縄文杉への生育の影響もさることながら、あわせてみられる大きな懸念材料に、トイレ利用に関する現状があげられる。

年間 9 万人が訪れる縄文杉

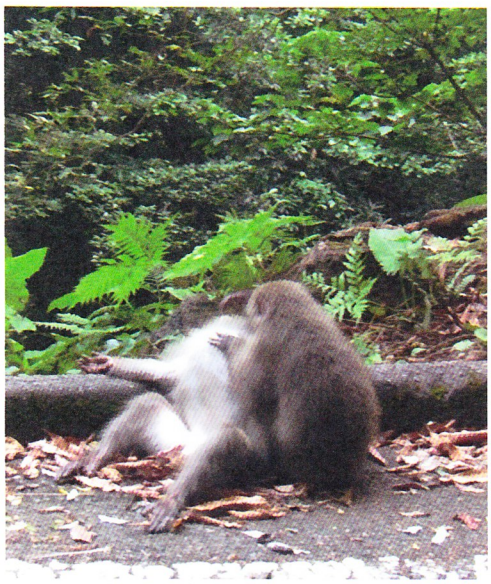
汲みとりと搬出作業は、役場職員やボランティア有志により人力でなされている。世界遺産に登録されたからといって特別な予算措置を受けられるわけでもないため、町は何とかやりくりして実費を捻出している。かつて、入山者がそれほど多くなかったときは、自然埋設で対応できていたものが、今では入山する人の数だけトイレの利用量も増え、自然の分解作用も飽和状態にある。携帯トイレの普及もそれほど進んでいない。

ハート型が人気のウィルソン株

■ウミガメ、シカ、サル、タヌキ

山岳部に入らずとも、ラムサール条約の登録地にもなっている永田浜や、永田から栗生を約 20km の隘路で結ぶ西部林道区間は、それぞれウミガメの産卵、照葉樹林が織り

ウミガメの産卵場所に保護柵が設置されている永田浜と、屋久島うみがめ館で飼育されている子ガメ



西部林道で遭遇したヤクザル

なす緑色と東シナ海の青色のコントラストが魅力的である。しかし、ここでも生態系保全を考えるときに避けては通れない課題が存在する。ウミガメは、NPO法人屋久島うみがめ館をはじめとする地域の方々の献身的な努力により、日本随一の産卵地としての環境が保たれている。ただ、ライトの点灯やフラッシュによる写真撮影を故意でなくともおこなってしまうことで、警戒心の強いウミガメは上陸を避けるという結果を招きかねないという。西部林道地域は、とくにヤクジカの増加が、私が前回屋久島を訪れた8年前よりもかなり目についた。屋久島では生態系のピラミッドのなかでおそらく頂点に位置するのはシカだと考えられている。かつては人間が動物の命をいただくことで、屋久島での生態系も繊細なバランスのもとに成立していたものが、保護の行き過ぎは却って人間と共生していた生態系に負の影響を与えかねない。ヤクザルの食害も深刻と聞くが、何しろ今回の滞在ではシカの多さが気になった。

また、林道を駆けるタヌキを目撃したが、屋久島にはもともと生息していなかったものが2000年に永田浜近くで初めて写真に収められた“外来生物”である。雑食性で、ウミガメの卵の孵化期には足跡が砂浜に残されていた事例も確認されている。

これらの現実に触れるとき、屋久島の自然は、世界遺産登録を契機に知名度が飛躍的に高まったことで、環境保全の必要性が意識されるなど利点も多かったことは確かであろう。一方で、人間の自然利用の負荷と抑制とがいずれも生態系に何らかの作用をもたらしていることを謙虚に受け止める必要性も感じた。

環境保全に対する明快な答えは、ある意味存在しない。地域レベルでのルール作りや、その段階に欠かせない地域住民をはじめとする多様な主体による合意形成の蓄積にこそ、その難問に挑める第一歩になると思う。このような直接見聞きしたことを、少しでも多く講義やセンター業務の体験プログラム等の場面に還元できたらと考えている。

一枚岩の花崗岩が印象的な千尋(せんぴろ)の滝

■書　架

『東日本大震災の教訓-津波から助かった人の話-』

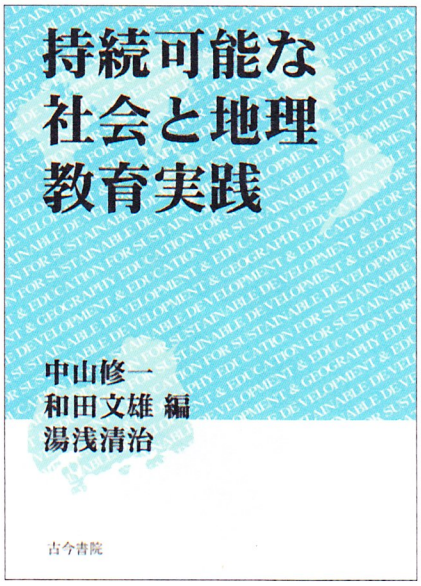
（村井俊治著、古今書院刊、2011年、￥1,800＋税）

3月11日に発生した東日本大震災は、今後私たちに「戦後」とならぶ「震災後」という節目をもたらすことになるだろう。本書は、「津波から得られた教訓を子孫に伝えるための記録」として後世に活用してほしいという願いが込められている。九死に一生を得た生存者が記した個人ブログやテレビ・YouTubeなどの動画、新聞や雑誌の内容を参考とし、速報性を重視した内容で構成されている。

筆者は、日常生活の場で地理や交通状態などを把握するといった点が重要と説くが、意外にも防災・減災の専門家の議論においては見逃されがちなポイントだったかもしれない。日本測量協会会長を務める土木工学の専門家が、寸暇を惜しみ上梓した一冊。

『持続可能な社会と地理教育実践』

（中山修一・和田文雄・湯浅清治編、古今書院刊、2011 年、￥5,600＋税）



2002 年 9 月に開催された、ヨハネスブルグサミットは、ESD(持続可能な開発のための教育)の考え方が世界に広まる契機となった。それをうけて、日本が国連に提案しユネスコが展開をすすめた「国連持続可能な開発のための教育の 10 年」の活動があるが、本書は地理教育の分野からその内容にもとづき小学校から大学までのカリキュラムの構築を目指した集大成といえる。

とくに第 19 章「大学における地誌教育の実践―持続可能な開発のための教育(ESD)の視点から―」は、大学でフィールド教育に携わる者にとってとくに興味深かった。とくに、最近地理学界で見直しが進む、地誌学の動態性と、ESD の掲げる目標とも重なること(地域にみられる諸事象に対して批判的思考と問題解決・探究学習を通して解決の糸口をたどる点)が多く、教育現場で ESD を扱う際の特徴を理解するのに大いに役立つ一冊である。

■連　載

長崎まちエコ探検⑨　軍艦島

街なかを歩いていると、何気ない景観に意外な歴史や人びとの思いが詰まっているのを知ることがある。本コーナーでは、そのような長崎の隠れた自然・歴史・文化などのさまざまなスポットをご紹介する。

1974 年に閉山し、2009 年 4 月よりかつての炭鉱の島の足跡をたどるツアーが始まった軍艦島(端島)。その参加者数は、今年 10 月末に 20 万人を突破する見込みである。

2009 年 1 月に、軍艦島をふくむ「九州・山口の近代化産業遺産群」が世界文化遺産の暫定リスト入りを果たした。登録に対する賛否はあるものの、日本の近代化を支えた遺構に再び脚光が集まってきたのは、地域に残る歴史を改めて振り返ることにつながる。軍艦島は、その象徴的な場所として、県外からも多くの人びとを惹きつける。

建物の老朽化など安全面を考慮して、現在は島の一部のみ立ち入り可能となっており、さるくガイドの説明を聞きながら、往時のにぎわいをたどることができる。　(取材=4 年 仁木可奈子)

□■編集後記■□

第 12 号をお届けします。予定より 1 か月遅れての刊行となり失礼しました。／この夏は、震災復興や節電など、例年とは異なる雰囲気のなかで過ぎていきましたが、防災や減災など、日ごろから私たちがどんな備えができるのかを考える機会にもなりました。／書架でも紹介しましたが、災害の記憶は確かに悲しい記憶を呼び覚ますものですが、生き残った者は、後世にその様子を語り継ぐ責務があるようにも感じます。／ニューズレター第 13 号は、11 月 25 日付で発行予定です。　(深見)

環境教育研究マネジメントセンター *News Letter*　(第 12 号)
2011 年 9 月 25 日発行
長崎大学環境科学部環境教育研究マネジメントセンター
〒852-8521 長崎市文教町 1-14
URL http://www.env.nagasaki-u.ac.jp/
Tel&Fax 095-819-2720(深見聡研究室気付)
E-mail fukami@nagasaki-u.ac.jp
(編集長：深見 聡)
印刷：(株)昭和堂